

宿曜經の研究

——東西文化交流上の一資料として——

善波周

目次

- 一 まえがき
- 二 宿曜經の梵本は存在しない
- 三 十二宮は西方の智識である
- 四 二十七宿と二十八宿について
- 五 インドの牛宿とその有無の問題
- 六 磨竭宮はインド所産である
- 七 歳元と曆法との関係
- 八 七曜傳來の徑路

一 まえがき

宿曜經、正しくは『文殊師利菩薩及諸仙所說吉凶時日善惡宿曜經』上下二卷（大正藏・二十
一・No.1299）は、三藏沙門不空が

詔を奉じて譯し、その弟子の楊景風が修注したと表記されている。そして楊景風の序文によれば、乾元二年に不空三藏がこの本を翻出し、端州の司馬史瑤が執持纂集したが、文義煩猥で學ぶ者が用い難いので、楊景風が親しく三藏の指揮を承つて更に修注をなし、門人が各々一本を持したとあり、時に「大唐廣德之二年也」と記しているから、まさに西紀七六四年に當るわけである。

ところで八世紀はじめ頃の當時のシナの情勢を概観するに、唐の玄宗皇帝はかねがね佛教に深く傾倒し、とくに密教關係の名僧智識をインドから招いて諸經を翻譯させ、ために密教は最盛期を現出した。すなわち、まずシナ密教の始祖といわれる金剛智三藏 (Vajrabodhi) は、西紀七二〇年に玄宗に招かれインドから長安の大慈恩寺に入り、譯經と密教の宣揚に大きな役割をなした。中國人である有名な一行禪師はこの金剛智三藏に灌頂を受け、みずからも數多くの密教關係の著作をなしたが、とくにかれが入寂した七二七年に完成した大沔曆五十二卷は曆法上にも貴重な著述であり、當時のシナの學術的優秀さを示すものであつた。宿曜經の譯者とされている不空 (Amoghavajra・不空金剛) は、實にこうした文化絢爛たる唐時代にシナで活躍した學僧であるが、かれは北インドまたは南インドの出身ともいわれ、年少にしてさきの金剛智三藏の門に入り、師に伴われて入唐したが、再び南インドに赴き滯留十餘年、經をたずさえて再び歸來し、唐の玄宗、肅宗、代宗三代の帝師として大いに密教の宣揚につとめ、七〇才で入寂している。

さて、こうした時代を概観してまず氣のつくことは、東西の交通が當時かなり頻繁に行われ、しかも文化の交流がその智識の幅と深さに強力な根強さを与えていたということである。このことは中國人である一行禪師が、單なる譯經だけではなく、みずからの手によつて當時の天文曆法に關する幾多の著述を行つてることによつても充分

知りうるのである。宿曜經はそうした一行の没後三、四十年後の作であるから、それだけに宿曜經の内容は、それ以前の智識を全面的に裏づけうる權威をもつものであつたはずであり、しかも現在においてもなお宿曜經が密教關係の一大權威書と認められていることから、このことは充分想像しうるところである。そうした點からしても、その後宿曜經についてのいくつかの註釋書や研究なども出ているが、しかしそれらはあくまで密教的立場からのものであり、これを學術的に取りあげたものは殆んど見當らない。もちろん宿曜經は、その表題の示すように、あくまで吉凶時日の善惡を説いた占星を主眼とするものではあるが、しかしこれを學問的に見るときは、その中に出てくる天文曆法はあくまで當時の最高科學であり、その内容が具體的なものであるだけに、その變遷の跡は明確である。すなわち、そうした天文曆法の中にはインドのものだけでなく、ギリシアやシナ、あるいは西域地方のものまで混然と入り交つている。しかもそれらは宿曜經という一つのるつばにおいて美事に集大成されており、本稿がえて宿曜經上下二卷を東西文化交流史上の一資料として取りあげたゆえんもここにあるのである。

二 宿曜經の梵本は存在しない

さて問題は、まず表題の「三藏沙門不空奉 詔譯」から始まる。すなわちこの場合、わざわざ詔の字の上を空白にして、詔を奉じて譯すとしているのは、皇帝を敬いその勅命によつたことを示しているが、同時にまた彼らが、朝廷から厚い庇護をうけていたことは、宋本によれば、^①不空の肩書きが「開府儀同三司特進試鴻臚卿肅國公、食邑三千戸、賜紫贈司空、諡大監正、號大廣智大興善寺三藏沙門不空」となっていることからこれを知ることが出来るであらう。

ところが問題はその「譯」の字にある。これは當時のそうした時代思想にも關連して考えねばならぬことであるが、普通に譯といえ、全譯、抄譯などのちがいはあるにしても、そこには何らかの原本が存在したはずであるところがこの宿曜經上下二卷に關する限り、そうした意味での譯はどうしても存在したとは考えられない。すなわち、いまつぶさにその内容筆致などを検討すると、そこには宿曜經を成立させた一つの纏つたサンスクリットの原本は存在しなかつた、というのが筆者の見解である。以下順を追うてこれを述べてみたい。

まず卷の上の「序分定宿直品第一」を見ると、それは次の文で始つてゐる。

天地初建、寒暑之精、化爲日月、烏兔抗衡、生成萬物、分宿設宮、管標群品、云々

そして引き続き、二十八宿中の張から始まる十四宿（牛宿を含む）の名稱をあげ、それを分つて六宮となすとし、（残りの六宮にはふれていない）つぎに、日月と辰星（水）から始まる五星の名稱とその大きさなどをあげているが、これが後という曜である。かくてその日月諸曜が空中において風に乗つて須彌山（Sumeru）の中腹の踰健陀羅（Yugandhara）の上を「二十七宿十二宮」において運行しているとなし、第一の師子宮から第十二の蟹宮に至るまでを二十七宿との關連配列において詳説し、それぞれに簡単な吉凶を書き加えている。

さて、ここまでの序説的な一段落において、まず總體的に氣のつくことは、最初の天地初建に始まる一連の文章は、その内容や語法から見て、古いインドの傳承だけでなく、その後の新しい智識をも十分盛つてゐる、ということである。しかも「烏兔抗衡」^②というような表現は、たとえ翻譯的美句と假定しても、それは思想的にもインドのものではなく中國式表現である。すなわちインドでは、最古の天文書たる Jyotisa-vedāṅga を始め、その他の各種 Siddhānta などにおいても、それらはほとんど始めから部分的説明に入るのが普通であり、このような卷頭の

一般的序説はほとんど見られない。だからこうした序説的名調子はサンスクリットのものとは思われず、たとえ一歩ゆずつてそれが不空の作としても、そこには有能な中國人の加筆があつたことは疑いない。というのは、十二宮の詳しい説明に入るまでの文章は、インド式のある意味での整然かつ冗漫たる筆致ではなく、すこぶる簡明かつ必ずしも内容的に整備されていない。とすると宿曜經の序分の始めの方は、おそらく不空みずからの筆ではなく、不空がそれまでの天文占星に關する諸説を斷片的に講述したのを、文章に巧みな弟子の誰か（端州司馬史瑤か楊景風）が編集添削したのであらう。しかし序分後半の各項目における一々の説明は確かにインド傳來のものであり、その内容もまた正確さをもっている。

とすると、表題の「不空譯」というのは、不空が何かサンスクリットの原本からそれを直接翻譯したということにはならない。換言すれば、もともと宿曜經そのものの梵本というようなものは存在せず、博學な不空が自らそれらを講述したのを、弟子達がそれを權威づけるために、殊更に「不空譯」としたことは明白であり、おそらくこうした例は他の經典においても見出されるところであらう。

次に卷下の方を見るに、これまた同じように「三藏沙門不空奉 詔譯」としているが、卷下は決して卷上の續きではない。すなわち、普通の經典において卷の上下としてゐるのは、多くの場合、中國編集者の便宜的區分であり、サンスクリット原文はほとんどそうした卷別法は用いていない。だから卷の上下の關係は原則として一つのものの連續であるが、しかしこの宿曜經の場合は決してそうした關係ではなく、それは明らかに卷上の補遺なのである。しかもその作者は、卷上のそれと決して同一人であるとは考えられない。というのは、卷下には卷上と内容的に同一なものかしばしば繰りかえされ、また系統の異つたものも混入している。この一事だけからしても、不空三藏と

もあろう高僧がそんな不見識なことをするはずもなく、これは不空がその時々々に講述したのを、おそらく楊景風あたりが、その不足分を覚え書き式にしたのを後になつて追加編集したのであらう。

三 十二宮は西方の智識である

いわゆる二十八宿（二十七宿については後述する）とは、黄道附近の顯著な恒星を基準として日月の運行を觀測して曆日を定め、あるいはそれによつて吉凶日時などを占つた制度であり、宿は星宿（skr. nakṣatra）とも稱し、單星または星座（constellation）の名を採つてゐる。これは古くからバビロン、インド、シナ、アラビアなどでも用いられてゐたものであり、密教ではとくに重要視され、いまでも星祭りなどに用いられてゐる。十二宮というのは、これまた黄道に沿つてこれを十二に分けた星座の名稱であり、同様に曆日や占星術の基礎となつてゐるものである。さて、まず結論的にいえば、二十八宿は極めて古い時代からインドで知られてゐたが、十二宮は全く西方の智識である。そしてそれがインドの文獻に現われるのはかなり遅く、だいたい西紀五世紀以後のことである。しかもその兩者がインド人の手によつて巧みに組み合わされたものが、いわゆるインド天文學といわれるものであり、その占星的なものを主眼として述べたものが宿曜經上下二卷にほかならない。

ところでこの占星術というのは、いまでこそ單に書物の上だけで運勢吉凶などを占つてゐるが、當初は一々星宿を觀測してその吉凶を卜したのであるから、占星家はまた天文學者でもあり、同時に曆法家でもあつた。そしてその基準となつたのが二十八宿であるから、古代人は今よりもずっと星宿に對して關心をもつてゐたわけである。ところがその二十八宿の起源についてはバビロン説とシナ説とがあり、前世紀の始めごろから多くの學者らによつて

論じられたが、それを實證する資料のないことから、いまだにそれは解決を見ていない。學者の中には、二十八宿はインド起源であると考えたものもあるが、しかし事實はおそらくバビロンあたりで發見されたものがアーリヤ人の東漸に従つてインドに入り、それが極めて古い時代に全くインド的に發展したものと考えられる。

インドにおいて、星宿に關する最も古い記事は、少くとも紀元前一千年以上前の傳承をもつリグ・ヴェーダ文獻中にも見られるが、それらは嚴密な意味における今日の星宿と解することは無理な點もあり、また二十八宿の前身と見られる二、三の星名もほとんど季節祭に關連していることは見のがせない。しかしそれがアタルヴァ・ヴェーダになると、今日と全く同じ順序の二十八宿が整然と列擧されており、ついで各學派の本集 (*Saṁhitā*) とか梵書 (*brāhmaṇa*) あるいは古い物語りを集めたプラーナ (*purāṇa*) などには、二十八宿あるいは二十七宿に關する占星 (*solar calendar*) として正しい意味の天文學的立場をとつてゐる。このように二十八宿はたしかに占星術と切つても切れぬ關係にあり、とくにインドにおいては全く不可分のものでさえあつたが、いまこれを科學的に取りあげることによつて、そこに多くの問題解決の鍵を見出しうるのである。それにはまず二十八宿そのものの正しい天文學的位位置が把握されねばならない。

さてアタルヴァ・ヴェーダを始めとする古代の二十八宿は、その順序のみが記述され、その位置を確認しうるような記事は全く存在しない。ところが五世紀以後、ギリシア天文學の影響のもとに書かれたスーリヤ・シッダーンタ (*Sūrya-siddhānta*) といわれる天文書を見ると、その第八の「星宿と遊星との交會の章」と名づけられるものの中に、婁宿 (*Aśvini*) から始まる二十八宿の經緯度が當時のインド式計算法によつて明示されている。そこでこれ

を現代天文學によつて換算すると、その當時の正しい二十八宿の黃經と黃緯が出てくる。その詳細についてはかつて拙稿において述べておいたが、その二十八宿がより古い時代のそれと同一であつたという立證があれば、ヴェーダ後期以來の二十八宿の位置は捕捉されるのであり、そうした意味で宿曜經卷上の「序日宿直所生品第二」は貴重な資料たりうるのである。

すなわちそこには牛宿を含む二十八宿の星數・形狀・主神・主姓・主食などが列記されているが、その記事内容は三世紀中葉に譯された「摩登伽經」の説星圖品第五のそれと全く同一である。しかもその原本である西紀早々の作と考えられる *Sārdūlakarṇāyadāna* もその通りであるし、さらに六世紀の作と思われる「大集經日藏分」の二十八宿もまた同じである。とすると宿曜經の二十八宿はまさしくインドのオーソドックスな傳承であり、しかもそれはその星狀などから、スーリヤ・シッターンタの二十八宿と同一なものであつたことがその比較對照によつて知られるのである。そうした意味で宿曜經の二十八宿はインド古來の傳承を正しく保持しており、それが密教占星術の土台となつてゐるので、いまそのサンスクリット名と星數・形狀をあげ、それが現在どの星に相當するかを表にすれば第一表のようになる。

次に、このインド在來の二十八宿と西洋傳來の新らしい十二宮との關係はどうなるか。宿曜經以前にはこれについて詳しく説いたものはなく、そうした意味でもこの宿曜經卷上のそれは重要な役割をなしている。すなわち序分第一の一般的序説の次に、まずこの十二宮の説明が出てくる。これはその當時、十二宮の制度が最も重要視されていたことを示すものであらう。そこではまず第一の師子宮から始まる十二宮に、二十七宿の各宿をそれぞれ四足 (pada 四分の一) ずつに分け、一宮に九足を配當し、これに簡單な吉凶をあげているが、この十二宮はもともとイ

第一表

宿曜經の二十八宿

番號	漢譯	サンスクリット	星數	形 狀	相當する距星
1	昂	Kṛttikā	6	剃 刀	γ Tau.
2	畢	Rohiṇi	5	半 車	α Tau.
3	觜	Mṛgaśīrṣā	3	鹿 頭	λ Qri.
4	參	Ādrā	1	額上點	α Qri.
5	井	Punarvasu	2	屋 杙	β Gem.
6	鬼	Puṣya	3	瓶	δ Can.
7	柳	Asleṣā	6	蛇 神	ε Hyd.
8	星	Māghā	6	牆	α Leo.
9	張	P.Phalguni	2	杵	δ Leo.
10	翼	U.Phalguni	2	跣 跌	β Leo.
11	轸	Hastā	5	手	δ Cor.
12	角	Citrā	2	長 幢	α Vir.
13	亢	Svāti	1	火 珠	α Boo.
14	氏	Viśākhā	4	牛 角	i Lib.
15	房	Anurādhā	4	帳	δ Sco.
16	心	Jyēṣṭhā	3	階	α Sco.
17	尾	Mūlā	2	師子頂毛	λ Sco.
18	箕	P.Aṣāḍhā	4	牛 步	δ Sag.
19	斗	U.Aṣāḍhā	4	象 步	σ Sag.
20	牛	Abhijit	3	牛 頭	α Lyr.
21	女	Śravaṇā	3	梨 格	α Aql.
22	虚	Dhaniṣṭhā	4	訶梨勒	β Del.
23	危	Śatabhiṣā	1	花 穗	λ Aqr.
24	室	P.Bhādrapadā	2	車 轆	α Peg.
25	壁	U.Bhādrapadā	2	立 竿	γ Peg.
26	奎	Revati	32	小 艇	ξ Pis.
27	婁	Aśvini	3	馬 頭	β Ari.
28	胃	Bharaṇi	3	三 角	35 Ari.

インドの思想ではなく、全くギリシアから傳つたものであるから、いま宿曜經の十二宮を西洋のそれと對照すれば、第二表のようになる。

ここでまず氣のつくことは、二十八宿中の牛宿が完全にオミットされ二十七宿となつてゐることである。これについては後に詳述するが、少くとも $9 \times 12 = 108$ という數字的なものが大きく働いてゐることは事實であらう。しかしともかく古代以來、人々は實際に星を見て曆日を定め運勢吉凶を占つたのであるから、二十八宿と十二宮と

第二表
宿曜經の十二宮

順序	宮名	二十七宿配當	相當する星座
1	師子宮	星 ₄ 張 ₄ 翼 ₁	獅子座 Leo
2	女宮	翼 ₃ 軫 ₄ 角 ₂	乙女座 Virgo
3	秤宮	角 ₂ 亢 ₂ 氏 ₃	天秤座 Libra
4	蝎宮	氏 ₁ 房 ₄ 心 ₄	さそり座 Scorpius
5	弓宮	尾 ₄ 箕 ₄ 斗 ₁	射手座 Sagittarius
6	摩竭宮	斗 ₃ 女 ₃ 虛 ₂	海豚座 Delphinus (西洋は山羊座)
7	瓶宮	虛 ₂ 危 ₄ 室 ₃	水瓶座 Aquarius
8	魚宮	室 ₁ 壁 ₄ 奎 ₄	魚座 Pisces
9	羊宮	婁 ₄ 胃 ₄ 昂 ₁	牡羊座 Aries
10	牛宮	昂 ₃ 畢 ₄ 觜 ₂	牡牛座 Taurus
11	姪宮	觜 ₂ 參 ₄ 井 ₃	双子座 Gemini
12	蟹宮	井 ₁ 鬼 ₄ 柳 ₄	蟹座 Cancer

の關係ならびに二十八宿から出た十二ヶ月名を現代の星座によつて簡単に圖示しておこう。

ところで次に、卷下の二十七宿十二宮圖という項目中の圓形のホロスコープ（占星圖）を見ると、第一の師子宮から始まる十二宮と二十七宿との關係は卷上の説明と全く異つてゐる。すなわちさきの十二宮の表にも見るように、師子宮は二十七宿中の星・張・翼に相當しているが、インドでは星宿あたりから始まる曆はヴェーダ曆に次ぐ第二期のものである。従つて第三期に屬する宿曜經が星宿を含む師子宮を第一にしていることは、宿曜經がインドの古い傳承をそのまま採用し、それに十二宮を配當したことを物語つてゐる。その證據には、宿曜經卷下（大正・

二十一・三九五頁）の二つのホロスコープのうち右側の方は宋本のそれであるが、それは第一羊宮となつており、二十七宿もそこには女・虛・危が配されている。しかるに左方の圖は明本のそれであるが、これは同じく第一羊宮から始まつてはいるが二十七宿配當は翼・軫である。ところで羊宮(Aries)から始まる十二宮はまさしく西方のものであり、それは西紀三四世紀に溯りうる。とすると卷上の二十七宿十二宮は古いインドの傳承によつたものであるが、卷下の方は西方の影響をうけた時代即應の作であり、ホロスコープがそれを證明している。こうした點から見ても、宿曜經

の卷下はあくまで補遺的性格のものであったことがうかがわれるのである。

四 二十七宿と二十八宿について

いわゆる二十八宿とは、古くからバビロン、シナ、インドおよびアラビアなどで用いられていたが、インドのみが何故に二十八宿のほかに二十七宿をもっているか。その一宿のちがいは例外なく漢譯でいう牛宿 (skt. Abhijit) の有無によるのであるが、こうした問題については、すでに早くから外國の學者らもこれに注目し、いろいろな面からこれを論じている。たとえばドイツのウエーバー教授は二十七宿の方を古い形であるとし、インド人が極めて古い時代にこの形をバビロンから知ったが、後に二十八宿を知るに及んでこれを採用したのである^④といっている。これに對してアメリカのホイットニー教授は、むしろ二十八宿の方を古い形と考え、たとえば二十八宿がより古いという文献がないとしても、インド人が古い時代にその智識を外國から借用し、さらにそれを國內において變更したのである^⑤といっている。しかしこれらの説はあくまで可想的なものであり、それを納得させる根據は示されていない。しかもこの問題は本場のインドでも、またシナや日本でも單にその兩方があげられているだけで、その理由については何ら解明されていない。

そこでこれを明らかにするために、まず試みにインドの古い文獻を拾つて見ると、二十七宿としているものには、*Taittiriya-saṁhitā* を始め、*Jyotiṣa-vedāṅga* や *Bṛhat-jātaka* などがあり、二十八宿としているものには *Atharva-veda*, *Taittiriya-brāhmaṇa*, *Sūrya-siddhānta* などがあげられる。これを見てもそれは年代的なものでもなく、また家系とか學派による傳承とも考えられない。そしてとくに甚しいのは、同一梵本においてさえ異本

によつてそれが異つてゐることがある。たとえば世紀早々の作と考えられる摩登伽經の原本たる *Sāradhakarā-vadāna* の刊行本^⑥には明らかに二十八宿とあるのに、その同じ個所が京都大學所藏の寫本では明白に二十七宿 (*saptaviṃśati nakṣatranī*) となつてゐる。しかも一方、その漢譯である摩登伽經が牛宿を欠いてゐるのに、その同じ個所の梵本は明らかに牛宿を取りあげてゐるなど、そこには多くの混亂が見られる。

ところがこうした同じような混亂が宿曜經においても見られるのである。すなわち、まず卷上の序分第一を見るに、前文の張宿から始まる十三宿には明瞭に斗牛女と列記され、これに虚を加えた十四宿がちようど二十八宿を二分する。ところがその同じ序分第一には「運行於二十七宿十二宮焉」という句が見られ、その十二宮の説明における磨羯宮の個所は、「第六斗三足、女四足、虚二足」となつており、斗宿と女宿のあいだにあるべき牛宿は欠けてゐる。そしてその序分の終り近くにも、宋本は「天道二十七宿、有闕有狹」としてゐるのに、明本ではそれが「天道二十八宿」となつてゐる。また次の宿直所生品第二では、一々の星宿の數や形その他の特性および占星事項を詳記しているが、そこでは牛宿が入つて二十八宿となつてゐる。しかしその牛宿の説明の部は一見して他の星宿の説明とは明らかに筆致を異にし、それが故意の加筆であることがわかる。ところがその加筆は決して宿曜經作者自身の作意ではない。というのは宿曜經のこの部分は全く摩登伽經の説星圖品第五からの借用であり、しかもその梵本がそうした挿入を行つてゐるからである。しかば二十七宿の方が古く、二十八宿の方が後代のものであるかというに、事實は決してそうではなく、二十八宿はあくまで天文學的立場からのものであり、従つてそれが古代社會に共通なものであつたことを知るのである。ところが、數字に異様なまでの關心を示し、何事にも數をもてあそんだインド人は、この二十八宿をも整數化するために $3 \times 9 = 27$ としたのであり、宿曜經卷下の「三九秘要法」はこ

れを立證するものである。すなわち二十七宿はプラーナの性格から生まれたインド特有のものであるが、一宿を欠く場合、何故にそれが牛宿だけに限られたか。それが明らかになれば二十七宿と二十八宿の問題も解決の糸口を見出しうるであらう。

五 インドの牛宿とその有無の問題

まず結論から先にいえば、バビロン、シナおよびアラビアなどの牛宿はすべて黄道に沿った山羊座 (Capricornus) にあるが、インドの牛宿たる *Abhiṣit* は、それらとは全く異なる黄道から遙か北方の琴座 (*Lyra*) であるというのが筆者の見解である。しからばインドの牛宿が *Lyra* であるという根拠は何か。

これについては以前に詳しく發表しておいたが、^⑦ここでは論を進めるためにその大略を述べると、まずこの牛宿についてはすでにヴェーダ後期あたりから問題があつたらしく、いま黒ヤジュール・ヴェーダに屬する *Taittiriya-saṁhita* を見ると、そこには牛宿を除いた二十七宿名が擧げられているのに、それより後代の同派の *Taittiriya-brāhmaṇa* には牛宿を含む二十八宿名が列擧され、しかもそれに引き續いて「牛宿と名づけられる星宿は斗宿の後(上)であり、女宿の前(下)である」との一句を入れている。これについてはいち早くウエーバー教授がこれに着目し、これを牛宿の天文學的位置を示すものとして、「牛宿は斗宿の上で女宿の下にある」と文法的に解し、インドの牛宿も西洋やシナの牛宿と同じく山羊座にあると主張した。ところがこれに對してホイットニー教授は「牛宿は斗宿の後で女宿の前にある」と解し、それは星宿の順序を示すものであると反論している。しかしその數次にわたる兩者の論争にもかかわらず、この問題は決定的段階に至らず今日に及んでいる。というのは、この兩説

は今まで見逃がされていた牛宿の問題に始めて科學的メスを加えたものであつたが、もともとこの一句は單に牛宿とその隣接星宿との相關關係を述べているだけであるから、その文句語法などを如何に詳しく考究しても、牛宿そのものの天文學的 position は本質的には出て來ないのである。^⑧ しかばそれを求めるにはどうしたらよいか。

そこで第一段階として、まずさきに述べたスーリヤ・シッダーンタの二十八宿測定記事に注目しなければならぬ。そこではインド獨得の計算法によつて各宿の經緯度があげられているが、しかし斗牛女虚の四宿だけの經度が數字でなく、お互の關係において述べられている。^⑨ これはたしかにそこに何らかの問題があつたことを暗示するものではあるが、幸いなことにその緯度だけは四宿とも明確に示されている。それによると斗宿は南に五、牛宿は北に六〇、女宿は北に三〇、虚宿は北に三六となつてゐる。この數字は黄道から北極星に向つての黄極緯ともいふべきもので、現今の黄緯とはやや異つてはいるが、ともかくその數字を見ても、牛宿は決して黄道に沿つた山羊座ではなく、數字から見ても遙か北方の琴座でなくてはならない。ところが問題は、そうしたスーリヤ・シッダーンタの牛宿は果してインド古來からの牛宿であつたかということである。

そこで第二段階として、それを解明するために宿曜經を始めとする漢譯佛典やその關連經典が大きな役割を果すのである。すなわちさきの宿曜經卷上の日宿直所生品第二の表を見ても明らかのように、牛宿は三星で形牛頭の如しとあり、またその主神・主姓・主食などから見ても、それは西紀三世紀中葉に譯された摩登伽經の昂宿から始まる説星圖品のそれと全く同じである。しかもその異譯たる舍頭東太子二十八宿經やそれらの原本たる前記梵本ならびにそのチベット譯と對照して見ても、それらは完全に一致している。とすると、不空譯の宿曜經の二十八宿はまさしく紀元早々のインドの傳承をそのまま忠實に傳へてゐることになり、より古いインドの二十八宿もまたその

通りであつたと考えざるをえない。こうした見地からして筆者は、インドの牛宿たる *Abhijit* はおそらくヴェーダ時代から *Lyra* であつたと断ぜざるをえないのであり、そのことはさらに他の方面からも考えうるのである。

そこで次にこの牛宿の有無ということが問題となってくるが、これはさきに述べたように、その最大の理由は占星的なものである。ところがそれを二十七宿とする場合、何故に牛宿をけずつたか。そこには何らかの理由がなければならぬが、それについては誰もふれていない。しかしこのことは牛宿の位置の問題にも關連して決して見逃がしえない問題である。

ところで、これは占星を主眼とする宿曜經ではオミットされているが、摩登伽經の二十八宿の説明中に、各宿の廣度ともいふべきものを月の運行する時間 (*muhūrta*, いまの四十八分) で表わしている部分がある。それを見ると、他の星宿はそれぞれの廣狹によつて四十五、三十、十五という數字となつてゐるのに、牛宿のそれだけが遙かに少い六ムフルタとなつてゐる。これは天文學的に、牛宿とその次の女宿との間の視角度の狭いこと物語つてゐる。だから強いて二十七宿とする場合は天文學的にもこの牛宿をオミットするのが一番自然でもあるが、しかし曆法的に全般を二分するにはどうしても偶數の二十八宿でなければ都合がわるい。そこでインドでは二十七宿と二十八宿が混然と雜居したのであるが、西洋やシナの牛宿は黃道に近い山羊座にあつたから問題はなかつた。ところがここに面白いことは、インドの牛宿が *Lyra* であることによつて、かつてそれが女宿の *Aquila* と同一線上に見え、名實ともに二十七宿の時代があつたということである。すなわち *Lyra* は遙か北方に離れて緯度として *Aquila* のちようど二倍の位置にあるので、これがある年代の黃道上から見ると兩星間の角度はかなり小さく見え、しかもそれは春分點の移動によつて少しずつ變つて行く。そこでいまノイゲバウエルの星表によつて牛宿と女宿がほぼ一直

線に見える年代を逆算すると、それはおおむね西紀前五〇〇年前後となる。そして昴宿が春分點に合したほぼ西紀前二五〇〇年頃には、牛宿と女宿との視角度はやや大きくなつてはいるが、しかしそれは他星宿の廣度とくらべて遙かに狭い。摩登伽經の牛宿の廣度が僅か六ムクルタであることはこの事實を裏書きするものといえよう。

このように純粹に天文學的立場からすれば、牛宿と女宿が一直線上に見えた時代があつたのであるから、その時代に二十七宿ができたであろうという假説も成り立たぬことはないが、しかし事實上そうした古い時代にインド人が二十七宿を觀測したとは考えられない。したがつて二十七という數字はあくまで天文學的なものではなく、それはインド人の占星的所産であつたと見るべきであらう。

六 磨竭宮はインド所産である

さて、インドおよび密教關係の十二宮がギリシアからの借用であることはすでに述べたが、そうなら何故に西洋にない磨竭宮がインドの十二宮となつたのか。

そこで、その磨竭宮という文字がいつ頃から文獻に現われたかというに、當時の天文智識をすべて記している摩登伽經にも十二宮の記事は全然なく、もちろんその原本たるサンスクリットのそれにも見當らない。ところが六世紀ごろの作と考えられる大集經の月藏分に、サンスクリットを漢字で音寫した十二宮名が出てくる。これはおそらく十二宮が漢譯佛典中に出てくる最初であらうが、それが音寫であることが頗る興味深い。そしてそこに始めて磨伽羅という字が現われる。そこでいまその音寫による十二宮名を列舉し、括弧の中にその原語とそれに當る星座名を示すと、

鳩槃 (Kumbha, 水瓶座)、彌那 (mina, 魚座)、迷沙 (mesa, 羊座)、毘利沙 (visabha, 牡牛座)、彌儸那 (mithuna, 双子座)、羯迦吒迦 (karkataka, 蟹座)、線呵 (simha, 獅子座)、迦若 (kanya, 乙女座)、兜羅 (tulā, 天秤座)、毘離支迦 (vṛścika, 蝎座)、檀婆 (dhanu, 射手座)、磨伽羅 (makara, 魚座)。

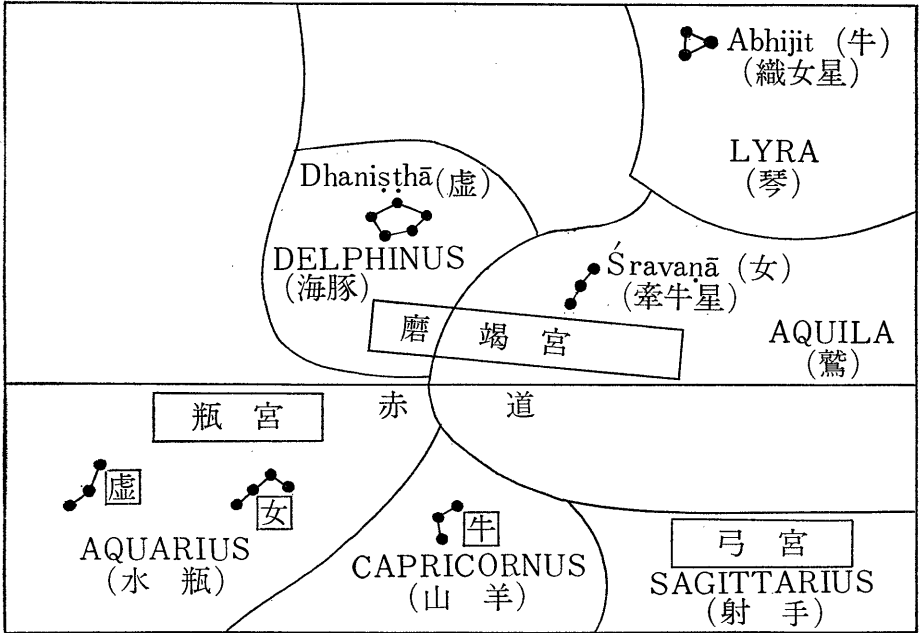
というようになり、問題は最後の磨伽羅がどうして西洋の十二宮のように山羊座でないかというところにある。

そこで宿曜經を見ると、そこでは十二宮の制度は吉凶の部でも大きなウエイトを占め、その名稱も磨伽宮を除いては、すべて西洋の星座名そのままを採っている。これはその磨伽に明らかに問題があることを示し、それはまた牛宿の問題にも関連してゐるのである。そこでまず makara という字を吟味して見ると、それは Sea-monster の一種であり、時に Crocodile (わに)、Shark (さめ)、Dolphin (いるか) と混同されるとある。そして漢譯では時に磨竭羅獸として出てくるが、その實體はともかく相當巨大な海獸であることはインドのいろいろな物語りによつても明らかである。ところがインドの磨竭宮は宿曜經の序分第一にあるように「斗三足、女四足、虛二足」であり、その虚宿はインドでは海豚座 (Delphinus) である。とするとまず次のようなことが考えられる。

すなわち、はじめ西方から十二宮が傳つて來たときには、その星座名はそのままサンスクリットに翻譯された。

それはさきの大集經の音寫によつても明らかであるが、しかしそのときはすでにインドが古來からの獨自の牛宿や女宿をもつていたので、西洋の山羊座の代りにインド在來のものを十二宮の中に入れた。そしてその際、すでに西洋の海豚座というものの存在を知つていたインド人がそれを makara と表現し、それが音寫のまま後代に傳つた。だからインドが磨竭宮を十二宮にもつてゐるということは、とりも直さず、インドの牛宿が Lyr、女宿が Aql、虚宿が Del. であつたことを立證するものでなくてはならない。従つてウエーバー教授のいうように、もしインド

磨 竭 宮 と 牛 宿 の 図



牛 女 虚 は シナ ・ アラビア の 二 十 八 宿

の牛宿や女宿が西洋やシナの牛女宿と同じように始めから山羊座や水瓶座にあつたら、決して磨竭宮というようなものは生まれなかつたはずである。そうした意味で磨竭宮の存在はインドの牛宿が Lyra であつたことを傍證するものでなくてはならない。

なおこれを試みにシナの側から見ても、普通に二十八宿中の牛宿といわれるのは西洋と同じように山羊座 (Cap) にあり、女宿は水瓶座 (Aqr.) にある。そしてそれと全く別個に織女星 (Vega) というのがインドの牛宿にあたる琴座 (Lyr.) にあり、牽牛星といわれるものがインドの女宿にあたる鷲座 (Aql.) にある。いまこれらの關係を簡単に圖示すると上図のようになる。

七 歳元と暦法との關係

つぎに、宿曜經卷上の序分第一の十二宮の説明の後に、引き續いて次の文が出てくる。

上古白博又二月春分朔、于時曜躔婁宿、道齊景正日中氣和、庶物漸榮一切増長、梵天歡喜命爲歳元。

ところでこの白博又というのは、一月を二分 (Paśa) し、朔 (二日新月) から望 (十五日満月) までを白パクシャといつてインド特有の曆日上の術語であるから、この一文は、その内容筆致からしても、宿曜經の作者がインド傳來の曆法を説明していることは明らかである。しかもインド曆の翻譯である九執曆の卷頭にも、これと全く同じ句が見出される^⑩。とするとその二月とは如何なる曆によつた二月であるか。

そこで宿曜經を見ると、右の一文に引き續き次のような順序で十二ヶ月の名稱があげられている。

角月、氐月、心月、箕月、女月、室月、婁月、昂月、觜月、鬼月、星月、翼月、

ところでこの角月 (Caitra) から始まる曆は六世紀以後から通用したものであり、たとえば七世紀の大唐西域記もこの順序で、しかもそれは制咀羅月、吠舍佉月というようにサンスクリットからの音寫でそれを表わしている。したがつて八世紀作の宿曜經が角月から始める曆をあげていることは當然である。だから宿曜經の作者が二月といつてゐるのはインド曆による氐月を指していると考えねばならない。そこでこの一文の大意は、「古いむかしに (インドの) 氐月 (Vaiśākha) の一日から十五日の間に春分の日が來たとき、太陽は婁宿 (Āśvinī) に宿つたが、そのときは昼夜が等しくて氣候がよく、萬物がもえ出しみな成長したので、梵天が喜んで (そのとき) 歳元をきめた」と

いうのであるから、その婁宿の正しい天文學的位置さえ知りえたら、それが何年頃であつたかということがわかる。そこで前掲二十八宿の表によつて婁宿の距星は *β*Aries であることを知るので、それが春分點に合した年代を星表によつて檢出すると、そこに B. C. 181 という數字が出てくる。もちろん當時は正確な觀測具があつたわけではなく、星數も二星または三星としたものもあり、しかも近くには一等星の *α*Aries もあつて、それが春分點に合したのは B. C. 393 年であるから、だいたい西紀前三世紀前後と考えればよい。

ところが右の文は、一讀したところ、如何にも太陽が婁宿に宿つたその二月を歲元としたかのごとく見えるが、事實はどうであるのか。いつたいインドの古曆については今までは一般に、ヴェーダ曆と西紀六世紀以後の角月を年初とする二種の曆があつたと考えられていたが、筆者はさきに、その中間に翼月 (*Phālguna*) から始まる第二期の曆が存在したということを指摘しておいた (拙稿「摩登伽經の天文曆數について」東洋學論叢)。すなわち摩登伽經の原本たるサンスクリットの寫本 (京大藏) に、*phālguna* から始まる十二ヶ月名が列記されており、また各月における滿月と新月のムフルタ數などの記事から、ヴェーダ後期には *phālguna* を年初とする曆が成立していたことが認められる。そしてこの宿曜經の一文が西紀前三世紀前後に歲元がきめられたことを物語つてゐる以上、それは前説を完全に裏書きするものといえよう。しかも宿曜經卷下に「正月爲翼月」の一句を見出しうることも、ヴェーダ曆と角月を年初とする六世紀以後の曆との中間に翼月を年初とする第二期の曆が存在したことは疑いないところである。しかもそれはほぼ西紀前三世紀前後から西紀五世紀ごろまで用いられたのであるから、それらは多くの佛典に出てくる。とくにパーリ語關係のものは年代的にもこの曆によつてゐるものが多いので、いまサンスクリ

ットの原名とともにパーリ語のそれも示しておこう。

第二期の曆表
(略 B.C. 300~A.D.500)

月順	月名	サンスクリット	パーリ
1	翼月	Phālguna	Phagguna
2	角月	Caitra	Citta
3	氏月	Vaiśākha	Vesākha(春分)
4	心月	Jyaiṣṭha	Jeṭṭha
5	箕月	Āṣāḍha	Āsāḥa
6	女月	Śrāvaṇa	Sāvana(夏至)
7	室月	Bhādrapada	Poṭṭhapada
8	婁月	Āsvayuja	Assayuja
9	昂月	kārttika	Kattika(秋分)
10	觜月	Mārgaśīrṣa	Maggasira
11	鬼月	Pauṣa	Phussa
12	星月	Māgha	Māgha(冬至)

の曆表には明らかに牛宿が入り込んでいるからである。

次に同じく卷上の序黑白月分品第六の最初に、「凡月有黑白兩分、從一日至十五日爲白分、從十六日至三十日爲黑分」[㊤]とあり、あとはその吉凶記事だけである。ところがそれと同じ内容のことが卷下の最初に出てくる。すなわち「西國每一月、分爲白黑兩分、入月一日至十五日爲白月分、入月十六日至三十日爲黑月分」[㊤]とあり、その吉凶についてと同じ偈頌が重複している。これを見ても卷上と卷下は決して一貫したものではなく、卷下は弟子の補遺集録であることは明白である。ついで二十八宿十二宮圖のところには、「西國皆以十五日望宿、爲一月之名、故二月

なお、このほか曆法に關連する記事を拾つて見ると、まず卷上の序分第一の月名列記の直後に、「大唐月建圖」という曆表が載つてゐる。これは註にもあるように楊景風が載せたものであるが、それは唐の正月から十二月に至る毎月の一日から三十日に二十八宿を順次配當したものであり、その日が何の星であるかが一目でわかる。そして十五日が満月であるから、それは後に述べる朔から朔を一月とする曆であり、インド在來の満月から満月を一月とする曆とは異つてゐる。しかも十五日の満月の日の星がインド曆のそれとやや異つてゐるのは、宿曜經が二十七宿を主體としてゐるのに、唐のこ

爲角月、三月名氏月……正月名翼月」とあり、次に二十七宿、十二宮、七曜を組み合わせた圓形のホロスコープを圖示しており、それ以外は吉凶善惡に關するものだけである。

ところでインドでは、古くから満月から満月までを一と月とし、その時の星宿名から取つた月名を與えている。だからこれをパクシャでいえば一と月は黑白の順となり、これを *purimānta* という。ところがインドでも朔から朔を一月とする白黒の順の *amānta* の法が極く古い文獻にも出てくる。しかし宿曜經卷下が西國皆以十五日望宿、爲一月之名としているのは、十五日の満月のときの星でもつて月名とするということだけで、それは *amānta* の場合でも通用する。とすると宿曜經の本文は、満月から満月までを一月とする *purimānta* の法には觸れていないことになる。そうした點で宿曜經のそれらの記述は天文學的にはやや不充分であるといえよう。^⑩

八 七曜傳來の徑路

いわゆる七曜思想というのは、もともとバビロンあたりがその起源であるといわれ、ギリシアなどにも古くから傳つており、それは地球からの距離によつて水星日火木土の順であつた。ところがインドにおいては、ヴェーダ時代の文獻にはこの七曜に相當するものは見當らない。しかしそれよりやや後代のアーラニヤカ (*Āraṇyaka* 森林書) に始めて七つの太陽という語が現われ、そしてプラーナ (*Purāṇa* 古譚書) 時代になると始めて七つのグラハ (*graha*) という語が盛んに出てくる。このグラハというのは漢譯では「執」と稱し、さらにこの七つに計都星 (*Ketu*) と羅睺星 (*Rāhu*) を加えて、これを九曜または九執と稱し、たとえば九執曆というような曆書もある。

ところで佛典に出てくる最初の七曜は三世紀中葉に譯された摩登伽經の上卷に出てくるそれであり、これを現行

の七曜名によつて示せば日月火木土金水の順序となる。ところがその原本たるサンスクリットではそれが金木土水火日月となつており、チベット譯はそれらともまた異つた金水土木火日月となつてゐる。ところが摩訶伽經の下卷を見ると、サンスクリットは月日金木土火水、チベット譯は日月木土火水とそれぞれ異つてゐるのに、漢譯だけが不思議なことに現行七曜の日月火水木金土の順となつてゐるが、これは明らかに後世の加筆であると考えられる。このことは六世紀の大集經や八世紀の義淨譯佛說大孔雀呪玉經などのそれもそれぞれ混亂してゐたことからしても、當時そうした現行七曜が知られてゐたとは考えられない。

ところで宿曜經ではその七曜はどうなつてゐるか。まず序分第一では日月の次に五星として水金火木土の順でそれがあげられてゐる。ところが同じく卷上の七曜直日品第四では、まさしく日月火水木金土という現行七曜があげられ、下卷の七曜直日曆品第八および同品の七曜占もまたはつきり現行七曜の順で説明されてゐる。

さて以上の事實からして、インド在來の七曜は決して現行七曜のような順序ではなく、現行の七曜思想はかなり後代に西方から入つて來たことを知りうるものであり、それが八世紀ごろになつて密敎の隆盛とともに完全に佛典の中に採用されたと見ざるをえない。その證據として宿曜經上下二卷がともに正しくその順序を保有しているだけでなく、同じく不空譯の佛母大孔雀經や一行禪師の撰した宿曜儀軌にも、この現行七曜の順序が記述されているからである。しかも最も興味あることは、その現行七曜がまさしく西方から傳つて來たという證據がこの宿曜經卷下の七曜直日曆品第八にはつきり示されてゐる。それは西方文化が東方に傳つたことを示す好資料として注目に値するので、いまその原文の最初の部分をあげると、

日曜太陽、胡名蜜、波斯名曜森勿、天竺名阿彌底耶。

宿 曜 經 の 七 曜

七曜名	胡名 (ソグド)	波斯名 (ペルシア)	天竺名 (サンスクリット)
日(太陽)	蜜 (mīr)	曜森勿 (yak-šanbed)	阿彌底耶 (āditya)
月(太陰)	莫 (māx)	婁禍森勿 (digar-š.)	蘇 摩 (soma)
火(熒惑)	雲漢 (wanaxān)	勢森勿 (se-š.)	盎哦囉迦 (aṅgaraka)
水(辰星)	咤 (tir)	掣森勿 (čār-š.)	部 陀 (budha)
木(歲星)	鵠勿斯 (urmazd)	本森勿 (panč-š.)	勿哩訶娑跋底 (vrhaspati)
金(太白)	那歇 (nāxid)	敷森勿 (šaš-š.)	戌羯羅 (śukra)
土(鎮星)	枳浣 (kiwān)	翕森勿 (haft-š.)	除乃以室折囉 (śanaiścara)

というように、以下、月火水木金土の順にそれぞれの胡名と天竺名があげられている。ところでこの胡名というのは、この場合、ソグト語のことであり、そこにはアヴェスタ語や、パーラビー語との関連もある。そして波斯名とはペルシア語のこと、それには新舊兩語があるが、これは *New Persian* の音寫であり、最後の天竺名とはいうまでもなくサンスクリットのことである。そこでそれらの原語を括弧内に示してこれを一表にすれば上表のようである。

さて右の原語のうち、胡名と天竺名とは明らかに固有名詞の對音であるが、波斯名の yak, digar, se……が一から七までの數字であることは頗る興味あることである。すなわちペルシアでは、一週を日曜から數えて、第一曜日、第二曜日と呼んだことがはつきりわかる。と同時に、この現行七曜の順序というものがギリシアからペルシアに入つて、それがすっかり曆法的に固定したことを物語っている。そしてそれが一方では中央アジアから西域を通つてシナに傳つたことを明白に物語っている。そうした意味で、この宿曜經卷下の七曜直日曆品第八の七曜記事は、文化傳來の徑路を明らかにする貴重な資料であるといふべきであらう。

このように見てくると、宿曜經上下二卷は、たしかに内容的にはあくまで占星吉凶を主眼とした當時の密教的所産ではあつたが、それを支えるものが二十七宿、十二宮、七曜である限り、そこには數多くの天文學的問題が伏在しており、それを文

獻學あるいは天文學的に取りあげることによつて、そこに多くの文化史的問題を見出しうるのである。宿曜經上
下二卷はそうした意味で、東西文化交流史上に一つの貴重な資料を提供するものといえるのである。

註

- ① 大正藏經の宿曜經は宋本を定本としているが、明本にはそのような肩書きはなく、「唐内供奉三藏沙門不空」としている。
- ② 烏兔抗衡というのは、日月が互に拮抗して運行していることであるが、中国では烏兔匆匆というような用い方をし、金烏玉兔として古くから知られている。インドでは太陽と烏との關係は明らかでないが、月は *śaśin* (兎をもつもの) という異名をもっている。しかし両者間の關連については知るをえない。

③ 拙稿「二十八宿と吠陀成立の年代」東方學報・京都第十三冊。

④ A. Weber : *Indische Studien*, vol. 9, s. 446, 1865.

⑤ W. Whitney : *J. A. O. S.* vol. 8, p. 58, 1866.

⑥ Cowell and Neil : *Divyāvadāna* p. 639, 1886. これはローマナイズ本であるが、デーヴァナーガリで書かれた刊行本に
は *SujitKumar Mukhopadhyaya* : *The Śārdūlakarṇavadāna*, 1954. と *P. L. Vaidya* : *Divyāvadāna*, 1958. がある。

⑦ 拙稿「印度の牽牛織女」印度學佛教學研究・第二卷第一號、および前掲拙稿。

⑧ タイティリーヤ・ブラーフマナの原文は *‘abhiñ nāma nakṣatram/upariṣṭād aśāḥānam/avastāc chroṇayai/’* と
ているが、ウエーバー教授はこれを *“über den aśaḥas, unter der śroṇa”* と解し、ホイットニー教授はこれを *“after
aśaḥas, before śroṇa”* と見、*upariṣṭād* の解釋につき數次にわたる論争を重ねた。

⑨ スーリヤ・シッダータの二十八宿の經度は斗牛女虚の位置だけが數字でなく、それは次のように述べられている。「斗宿の
本星は箕宿の半分であり、牛宿は同様に箕宿の端にあり、斗宿の端に女宿がある。しかし虚宿は女宿の四分の三の部分に連つ
てゐる」

⑩ 九執曆は大唐開元占經中の一巻であるが、それは内容的にインドのものである。しかもその巻頭の序説のところに宿曜經のそれと全く同じ「肇自上古白博又、二月春分朔、干時曜躔婁宿……」の句がある。九執曆の詳しい研究は、藪内清博士によつて「隋唐曆法史の研究」中に述べられている。

⑪ J.Filliozat 教授著、L'Inde Classique, vol. II, 1953. の附録三の表に、Védique と六世紀以後の Caitra 月を年初とする二種類の曆をあげているだけで、第二期に属する曆にはふれていない。

⑫ 中國は始めから朔から朔を一月とし、西洋および現行太陽曆でも一日から三十日あるいは三十一日までを通し番号で呼んでいるが、インドでは月名でも日數でも決して通し番號は用いない。すなわち日の場合は、必ず何月の何パクシャの第何日というように呼んでいる。だからもし五月以降の月名や十六日以降の文字があれば、それは中國曆に換算したものである。したがつて宿曜經卷上の黑白月分品第六は梵本からの直譯ではなく、その説明であることがわかる。

⑬ インドではすでにヴェーダ後期からかなり正確な太陰太陽曆をもっており、それに續く第二期の曆にしても、それは摩登伽經の中に詳しく説かれ、完全に満月から満月を一月とする *pūrṇimānta* であるのに、宿曜經の本文が全然それに觸れていないのは不思議である。これはおそらく宿曜經が占星を主としたので、どちらか一つの曆だけでよかつたからであろう。

⑭ 密教がこうした占星吉凶を重視したことは古い傳統によるものであり、楊景風も二十七宿十二宮圖の註の中で、「經に云う、日は一倍の力あり、宿は四倍の力あり、曜は八倍の力あり、好時の力は萬倍なり」といつているように、宿と曜とに重點がおかれていたので宿曜經という名稱が興えられたのであろう。しかしあれほど詳しく説かれている十二宮の力に言及していないのは、それが後代に西方から傳來したものであるからか、あるいは宮が宿を含んでいるからであらうか。

